

# ARTICLE

## 履修証明プログラム「桜おとなカレッジ」 から見えてくるもの ～桜の聖母短期大学の社会人学習支援～

桜の聖母短期大学キャリア教養学科教授  
桜の聖母生涯学習センター長 三瓶千香子

### 1. 多様なチャレンジが受容される時代に

平均寿命の延伸によって「人生100年時代」というワードが多くの人々の共通語になりつつある。この「人生100年時代」を生きる私たちは、急速な変化に直面している。このような表現をすると、まるで大きな課題に追われているようなニュアンスに感じられるかもしれない。もちろん「VUCA社会」と表現される不安定・不確実・曖昧・複雑で解のない社会であり、未来に対して不安を抱える機会も多い。しかし筆者はあえて、コロナ禍を経て「AIやAIをはじめとした技術革新のスピードが従来よりも増した今、何か窮屈な固定的な慣習や認識から人々が解放

される時期とポジティブに捉えたい。ロボットやAIと共存しながらより良い人生（ウェル・ビーイング）を求めていくために、そして自己実現を目指すために、「不確定な社会だからこそAIにはない人間の力とは何か」「私にしかできないこととは何か」さらにいえば「私とは何か」をいつでもどこでもどのようにしても追究して良い時代を迎えているのではないだろうか。例えば「複線型」「マルチステージ型」に移行である。これまでの教育↓仕事↓引退という「単線型」ではなく、複業・転職・起業など多様なチャレンジが評価されるようになり、さらに学び直し・学び重ねの継続によってこれまでの経験と新たな知見を有機的に融合させて別分野や地

域へ応用・還元といった拡張的なライフスタイルが共通理解されつつある。

このような様々なライフスタイルの充実化の方策の一つとしてリカレント教育が挙げられる。周知のとおり、リカレント教育は1970年にOECDが提唱し、1973年の報告書によって国際的に広く認知された概念で、社会人になっても学びと他の諸活動（労働、余暇など）などを生涯に渡って交互に行なう生涯学習の戦略である<sup>1)</sup>。我が国では「キャリアチェンジを伴わずに現在の職務を遂行する上で求められる能力・スキルを追加的に身に付けること（アップスキリング）や、現在の職務の延長線上では身に付けることが困難な時代のニーズに即した能力・ス



三瓶 千香子  
(さんべい ちかこ)  
1974年郡山市出身。上智大学大学院（博士課程前期）修了。2006年校の聖母生涯学習センターの研究員として着任し、生涯学習センターの開放講座プログラム企画や地域に立脚した短大の開放推進などを行い、2010年に校の聖母短大の専任教員として着任。専門は生涯教育学。短期大学では生涯学習概論、教育原理など教育学、キャリア開発系科目、編入支援系科目を担当。3.11直後から開設された共通科目「福島学」の立ち上げメンバーであり、今年度まで継続して主担当。現在、全日本大学開放推進機構監事、福島市国際交流協会理事、KFB福島放送番組審議委員、福島県立図書館協議会委員、福島市社会教育委員、福島市産官学プラットフォーム事業「人生100年時代学び直しチーム」座長、西会津町若者人材育成塾「N-Labo」塾長、公益財団法人福島県文化振興財団理事を務める。

キルを身に付けること（リスクリソグ）の双方を含むとともに、職業とは直接的には結びつかない技術や教養等に関する学び直しも含む広義の意味」として整理されている<sup>2</sup>。すなわちリカレント教育の特徴は、社会と教育機関を往還的・回帰的に歩みながら自らの人生を構築し、自己実現を目指していく点にある。ただし、今般、理解されているリカレント教育プログラムは、経済成長への貢献の観点から個人の職業能力の向上・キャリアアップを目指すものが多い。しかし、この特定の目的や内容に特化している傾向に関して、出相（2021）は、OECD が当初唱えた理念、目的に改めて注目してもよいとして「生涯発達のプロセスの中で、人は職業能力の向上に向けてのニーズだけではなく、様々な思いや望み、課題を抱えていると考えられ」、様々な知的資本を持つ高等教育機関は、学習機会を創出する側、学習者を支える側としてリカレント教育の目的を狭く捉えるのではなく、「バランスよく、多様なニーズに応える場であるべき」と指摘している<sup>3</sup>。

では、地方の小さな私立短期大学では人々の多様な学習ニーズに応えるべく、

どのような取り組みをしているのだろうか。本稿では筆者の所属先である桜の聖母短期大学の事例を紹介したい。

## 2. 「桜おとなカレッジ」で多世代に短大を開く

桜の聖母短期大学（福島市・以下「本学」）は、幼・小・中・高・短大を擁する桜の聖母学院の一部門であり、1955（昭和30）年に開学されたカトリック女子修道会を母体に愛と奉仕の精神をもって社会貢献を志す人材の育成を建学の精神としている短大である。主として本学の生涯学習を全学的に推進しているのは、短大に付設している桜の聖母生涯学習センター（以下、「センター」）である。学院全体が掲げる教育目標「人間教育の継続」に基づき、1992（平成4）年の設置以降、宗教・歴史・語学・運動・料理など多様な開放講座によって地域の人々へ学習機会を提供し続けている。2003（平成15）年には、「短期大学がコミュニティ・カレッジとしての役割をはたす一つのよいモデル」とその先駆的、歴史的な大学開放機能が評価され<sup>4</sup>、文部科学省「特色ある大学教育プログラム（G

P）」に採択されている。

現在の生涯学習センターの取り組みは、（1）年間180以上の開放講座（2）全県的な地域連携講座（3）本学独自の履修証明プログラムの3つに整理できる。特に（3）は紙幅の関係上、全学的なリカレント教育の一環として、（3）を紹介したい。

### 〈1〉履修証明プログラム「桜おとなカレッジ（SOCC）」の概要

SOCC（Sakura Otona College）は文科省が推進している要件を踏まえて、①体系性②履修（学修）時間を整備した2018年度から設置した本学独自の履修証明プログラムである。①に関しては、生涯学習センター企画・運営の開放講座と本学の正規課程科目（正課科目）が組み合わせられた3つのコースから科目を選ぶことで分野・内容の体系的性が担保されており、②は60時間以上である。「広学深歩」というコンセプトを掲げており、その文字の通り幅広い学びを通じて、深く人生を歩むことを推奨するという意味が含まれている。上記①②の要件を満たせば、学長名の履修証明書を交付される。以下、

3コースの特徴および代表科目を示す。

(a) リベラルアーツ探究コース

自身の生き方を模索するために現代社会の変化、趨勢を知るコース。教養を蓄積し、自ら「知」と「知」を繋ぎ合わせていくことを目指す。

(科目例) キリスト教学、日本国憲法、経済学、現代社会論、心理学、国際関係論など

(b) もつとグローバルコース

グローバル化が進む現代社会において国際的視野を広めるコース。語学力を高めるとともに、多様な文化や価値観を学び相対的に自身を深めていくことを目指す。

(科目例) キリスト教学、異文化理解、ツーリズム英語、韓国語、中国語など

(c) サード (3rd) プレイスづくりコース

「家庭」「職場(仕事)」の他につながりを創出する「第三の場」とは何かを考えるコース。地域などにおいて新たなコミュニティを自ら創り出せるような視点、視座の獲得を目指す。

(科目例) 人間関係論、心理学、公共政策論、プランニング入門、地域

形成論など

特筆すべきことは、全コースには「生涯学習概論」と「図書館サービス概論」の選択必須科目が設けられている点である。知識基盤社会における知の更新の必要性や生涯学習活動支援の在り方、現在のリカレント教育の浸透や拡充を支える仕組みを理解し、学び直し・学び重ねの意義を深く捉え直すことをねらいとしている。

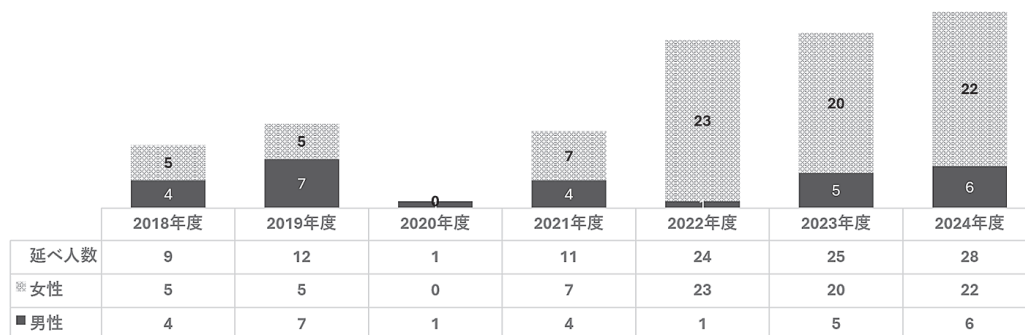
〈2〉SOC受講生のデータから見えるもの

2018年度から2024年度後期までの6年間のデータ(コロナ禍時期を除く)から看取できるものは何だろうか。紙幅の許す限り以下、私見を述べてみたい。

(1) 受講生は60代・70代に集中

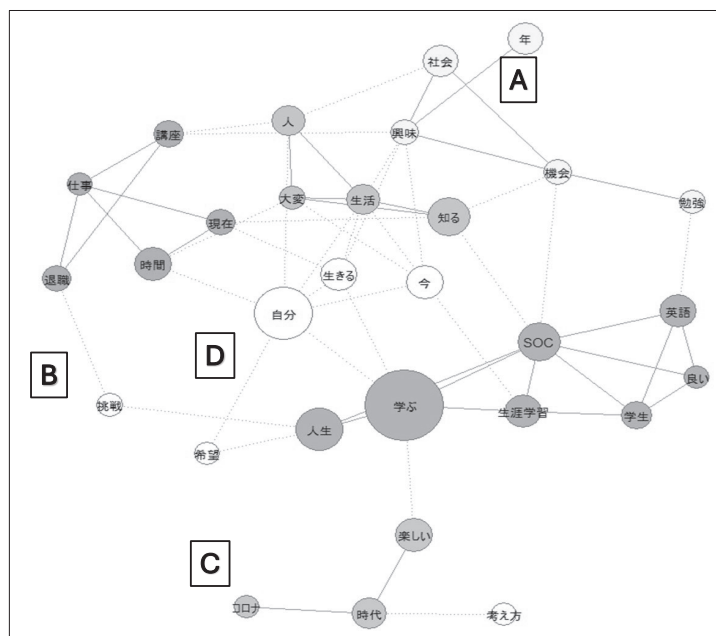
受講者の実数は45名、延べ人数は110名である。グラフ1でも分かるように、SOC開始時の2018年度は9名だったものが2024年度の申込者が約3倍に増えている<sup>5</sup>。男女割合は25%・75%(1・3)であり、年齢層は50代12%、60代55%、70代30%であり、総受講生の平均年齢は64・9歳である。

【グラフ1】 SOC申し込み人数推移



コロナ後の申し込みの増加と60代・70代に年齢層が集中している点から見えることは、何だろうか。図1は受講生

図1 受講動機シートの共起ネットワーク



がSOC申し込みの際に提出された申込理由書をテキストマイニングし、共起ネットワーク図にしたものである<sup>6</sup>。この図のA部分を見ると「年齢」を重ねるごとに「社会に興味を持ち、勉強の機会」をSOCと捉えていることが分かる。B部分からは「仕事を退職し、自らの時間を短大で学び直すという挑戦」に充てたい意向が見えてくる。実際には申込書には「退職後の終活に向か

う残された人生を充実した意義、価値ある、悔いのない毎日になりたい」「退職し、ワークロスで落ち着かない毎日を送っていたが、SOCを見つけてこれだ！と思いつく前向きな気持ちになった」「自分が行ったことがない、やったことがない世界への挑戦をするためには、学びが必要」などの記述もある。これらの背景には「人生100年時代」という長寿化に伴う知識の更新の必要性の自覚や当時の政権によるリスクリング政策意向発言も追い風になっているかと思われる。さらにコロナ禍という社会

の大きな変化は看過できない。  
新しい日常を迎えざるを得なかったコロナ禍は、人々に時間の過ごし方さらに言えば今後の生き方を問い迫ってきたのではないだろうか。図1のCおよびDのクラスターを見ると「コロナ時代—考え方」というラインがあり、それが「楽しい—学ぶ—人生」に繋がっており、ここからコロナ時代を経て人生を学びから楽しくしていこうという志

向が読み取れる。また「学び—自分—生きる—生活—知る」というラインでは、「学びによって自分の生き方を知ろう」という意志とも解釈できるかもしれない。現に申込書には「自分とは何者であるかを追究したい」「コロナ時代、人生がいつべんに暗闇の中に入ってしまったような、どうすることもできない日々を送った。SOCでは学び合う楽しさを身に付けていきたい」という記述がある。やはりコロナ禍は退職後の60代・70代の人々の生き方と学びについて自己対峙を迫った時機となったのではないかと思われる。

## (2) コース別の申込割合

3つのコース別における申込割合をみると、高い順に「リベラルアーツ探究コース」51%、「もっとグローバルコース」36%、「サードプレイスづくりコース」12%となり、教養を高められるコースが人気を博している。内閣府による「令和4年 生涯学習に関する世論調査」でも、「教養を深めるため」を「学習した理由」として挙げている割合は60代に多い<sup>7</sup>。受講動機例としてリベラルアーツコース申込書に目を移すと「二つの物事に対して知識があるのとな



われていた。勇気を出して学生さんと一緒に授業を半年間受けた。とても楽しかった」「学生さんと一緒に学ぶことができるのは素晴らしいこと。貴重な体験である」という記述が散見される。

特筆すべきことは、学生たちが教室という知的空間が同一年齢主義で構成されていることを疑い、多様な年齢がもっと混在してもよいのではないかといった意見を出すようになった点である。異龄共学は学習者の視野狭窄的理解や認知を気づかせ、各世代の「当たり前」という概念を壊し得る大きな意味を持つと言えよう。

#### (4)「私を知る」機会の提供と生涯学習の駆動力とは

受講生の学習継続を駆動しているものは何であろうか。これまでも言及してきたが、申込理由書に基づく図1では「学ぶ」という大きな円から「自分—人生」「生涯学習—SOC」が繋がっており、これまでの経験の意味づけや豊かな人生の追求がSOC受講の根底的理由であると推測できる。

ところでSOC設置から2024年度前期の間に履修証明書を交付された者は9名（証明書取得までかかった平均

均年数は1・7年）であるが、取得後も別コースに移行してSOC受講者になり続けている者が44・4%であることは注目すべき点であろう。

表1はSOC受講前の申込理由書と受講後アンケートの頻出語リスト比較表である。表1および図2を見ると、SOC受講者を内面的に駆動しているものは、証明書取得そのものではなく学び続けること（生涯学習）で「自分を知る」であることが見えてくる。表1の受講前の頻出語第2位は「他人」であったのに対し、受講後では「自分」という言葉が頻出語第3位として登場し、「他人」という言葉がトップ10に含まれていない。また図2のクラスターEを見ると、受講前の図1クラスターDよりも「自分」という円から自己理解につながる言葉のラインが増加し、「講義や学習によって、自分を理解し考える」ようになったことが読み取れる。

また興味深い点は、受講後アンケートには授業に実際に出てみないと出てこないワードが多く登場している点である。図2のクラスターGやHでは「レポート」「グループワーク」の円から「提出」「意見」「発言」といったアウトプッ

トを表す言葉がつながり、多様な授業の方法が受講生にとって印象深くかつ学びへと深化していることが推測できる。

以上から、その科目個々の専門知識の修得はもちろんだが、授業において学生との交流や実際に様々な形で自分の考えを言語化することを通じて、終わりなき自己理解あるいは自己課題の発見が促進され、学びへの駆動されているのではないだろうか。

#### 〈3〉カリキュラム以外の特徴

以上のように、①体系性②履修証明書の交付③若い学生との異龄共学という特徴を持つSOCを通じて、受講者は「自己理解」「自己探求」が生涯学習の継続力としていることが分かっていた。さて、ここではSOCのカリキュラム以外の特徴を2つ紹介したい。

##### (1) おとなのためのオープンキャンパスの開催

社会人向けの学習支援には、社会人入試・科目等履修生制度・聴講生制度・履修証明プログラム・開放講座など多様な制度があるものの、諸制度の違いを知られていないことが多い。また全国的にオープンキャンパスは高校

生に向けられているのが一般的であり、高等教育機関で学び直し・学び重ねのニーズを持つ社会人向けに特化したものは多くはない。

そこで本学では建学の精神、生涯学習社会の動向、各種履修制度の違い、SOC受講生からの体験談、学内ツアーなどを内容とした社会人向けだけのオープンキャンパスを開催している。この事業の重要な機能は、学習に対する不安の払拭である。社会人には、若い学生の中に混じる不安やキリスト教信者や女性が条件とされているのではないかなど不安を持つものが少なくない。独りぼっちではないこと、男性でもSOC受講者になれることなどへの安心感へつなぐことが本事業の意義である。

## (2) SOCの会

この会は、SOC受講者らが互いの情報交換や学習の深化を目的として自主的に結成したネットワークである。履修している科目も異なる各受講者は、ともすれば横のつながりがないままになってしまふ。令和4年の「生涯学習に関する世論調査」によれば、「学習していない理由」のうち「一緒に学習する仲間がいらない」が全体の5・6%を

占め、特に70歳以上では9・4%に上っており<sup>10</sup>、学習仲間の存在が生涯学習促進の重要なファクターであることが分かる。特筆すべき点は、あくまでもSOC受講生が自主的に曜日・時間・方法を決め、対面もあればオンラインで実施する場合もあり、自由参加をルールとして緩い紐帯を構築している点である。彼らは週1程度、自分の履修している授業内容や感想、ノートの共有、次学期に履修してみたい科目、自らの社会活動や趣味などの意見交換と人間関係の構築の場を創出している。短大側は場所を提供するにとどまり、その活動内容には全く介入せず、受講者の自主性によって自由度の高さを維持していることによって、学習者としての仲間意識が醸成され、学習の継続力にもつながっていると言えよう。

## 3. 課題の整理と使命——まとめにかえて——

最後に本学における社会人学習者支援の課題について整理しておきたい。

第一に、SOCをはじめとする本学の社会人学習者に対する取り組みをさらに地域へ周知・浸透させることが挙

げられる。繰り返しになるが、本学は生涯学習センターをプラットフォームとして30年以上も社会人へも学びを提供し続けている。目まぐるしい社会変化を伴う人生100年時代を迎え知の更新が不可避となっている昨今、地域密着型のリカレント教育拠点として多種多様の制度を設けていることを知らしめていく必要がある。

第二に、今日の社会動向や仕事に求められる人材像を鑑みたキャリアアップ・キャリアチェンジプログラムの検討である。既述のようにSOCは人文系教養科目が多く、受講生の年齢層にも偏りがある。我が国では社会人の高等教育機関での再学習者は増加傾向になく、国際比較によってもその低さは指摘されている<sup>11</sup>。三菱総合研究所のリカレント教育の実装に関する調査によれば、企業側も社会人自身も今後必要と考える知識・スキルは、「マネジメント・リーダーシップ(56・3%)」「対人スキル・コミュニケーション(45・2%)」「問題設定力・問題解決力(44・0%)」となり、幅広い仕事に汎用できるスキル学習ニーズが高いことが分かる。一方、学習の開始・継続の最大阻

害要因として「現在の業務に役立つイメージが持てない（26・6%）」であることから<sup>12</sup>、高等教育機関がいかに上記スキルに関するプログラムを策定し、現役世代へ説得性をもって提供できるかが問われている。

第三として学習成果の活用支援が挙げられる。学びをどのような場面で活用し、自己実現を目指すことができるかという支援である。例えば取得した履修証明書の意味・効用をどうやってもたらせるかの検討も含まれよう。先に挙げた内閣府の調査では「今後学び直しをする学校の情報収集を行う際の講座内容以外の重視する情報」のうち44・2%が「講座を修了することにより得られる証明書や称号など」を望んでいるものの、同調査の「学習していない理由」の2・4%が「学習しても職場などから評価されない」と答えている<sup>13</sup>。これは本学のみで解決できるものではなく、企業を含めた社会全体が学習歴社会へさらに大きくシフトしていく必要があるが、本学の履修証明書の意義づけの模索も大きな課題の一つと言える。

本稿は、地方の小規模短大の大学開放と生涯学習の観点から、特に独自の履修

証明プログラムを中心として社会人学習者支援の取り組みと今後の課題に関する整理を試みた。先に見た三菱総合研究所の社会人調査において、大学又は大学院での学習が民間教育事業者が提供するプログラムより優れていると感じた点として、①講師の専門知識レベルの高さ②しっかりと学べることがトップ3に入っている<sup>14</sup>。生成AIに代表される科学技術の目覚ましい発展社会において、学院全体の教育目標として「人間の教育の継続」を謳うカトリック系教育機関の特徴を生かし、多様な世代の対話機会を設け、人間らしさとは何か、人間しか持ちえない智慧とは何か、人はなぜ学ぶのかを追究する場の提供が、本学により一層の使命となることは間違いないであろう。図2のI部分に表れているように、「人間を学び」「人間に学べる」機会をさらに創出していきたい。

1 CERL, "Recurrent Education, A Strategy for Lifelong Learning", Paris, OECD (1973) (「リカレント教育—生涯学習のための戦略」)

2 中央教育審議会生涯学習分科会「第11期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」全ての人のウェルビーイングを実現する、共に学び支えあう生涯学習・社会教育に向けて」20

22年8月。(最終閲覧日2024年11月1日)

3 「OECDのリカレント教育の理念と今日の日本におけるリカレント教育の意味」『UEJジャーナル』第36号、全日本大学開放推進機構、2021年。

4 財団法人大学基準協会特色ある大学教育支援プログラム実施委員会「審査結果について」大基特プ委13号、2003年9月18日付。

5 2020年度はコロナ禍のため、SOCの積極的な受け入れ体制を行わなかった。

6 本稿では自由記述のテキストマイニング分析に際して、樋口耕一が開発したKH Coder (3 Beta 07d) を利用した。申込理由書は7671語数、受講後アンケートは2060語数である。(参考) 樋口耕一「テキスト型データの計量的分析——2つのアプローチの峻別と統合」『理論と方法』19(1)、2004年、101-115頁。

7 内閣府「生涯学習に関する世論調査」(令和4年7月調査) <https://survey.gov-online.go.jp/04/04gakushu/> (最終閲覧日2024年10月31日)

8 このテキストマイニングはKH Coder (3 Beta 07d) を利用した。

9 SOCには申し込まないものの単発の開講講座やセンター企画の地域連携事業に参加する者を含めれば、この数値は50%を超える。

10 前掲書、内閣府調査。

11 たとえばOECDの2021年の統計(Education at a Glance)によれば、25歳以上の学士課程入学者の割合が平均15・9%に対し日本は1・4%であり、リカレント教育による成人層の能力開発に非常に後れをとっている。

12 三菱総合研究所「リカレント教育の社会実装に向けた調査研究・普及啓発パッケージ事業報告書」2024年3月(最終閲覧日2024年11月11日)

13 前掲書、内閣府調査。

14 前掲書、三菱総合研究所。